①食べることに関する指導の在り方

沖縄県

1　研究テーマ及び研究の観点

⑴　研究テーマ

幼稚園における食育に関する調査研究

～ひと･こと・ものをつなぎ

心と体をはぐくむ食育をめざして～

本県では幼児の望ましい食習慣の定着と食育の向上に資することを目的に，地域の特色と実態を踏まえて，研究の視点をそれぞれ定め「幼児の心の育ち」を基軸にした食育を実践研究することとした。

幼稚園における食育は，単に偏食指導や栄養指導をするのではなく，「ひと・もの，こと」とかかわる幼稚園生活の中で，実際に野菜などを育てたり，調理する体験などを通して食べ物が話題になったり，一緒に食べたい仲間ができたりすることで，望ましい食習慣に必要な心情・意欲・態度が幼児に育つことと捉え，本研究では下記の４つの視点から，幼児の食への関心の高まりを探ってみることにした。

① 地域の方々と野菜作りの体験交流をとおして幼児の人とのかかわりや食べ物への興味・関心を高める。

② 共働き家庭の多い実態から，朝食や弁当づくり等をとおして親子の心の繋がりと食への関心を探る。

③ 幼児が地域の昔話や地域に伝わる伝統文化に接することで，地域や家族の一員としてかかわり，家族や地域の人々を大切に思う気持ちを育てるとともに，伝統文化や伝統食に興味・関心を高めるプロセスを探る。

④ 地域の高齢者などと幼稚園が連携し，手作り体験をとおして，「一緒に食する楽しさ，作る楽しさ」を味わう体験から食への興味・関心の高まりを探る。

2　地域の概要

本県はほとんどの公立小学校へ幼稚園が併設されている。幼稚園では一部給食が導入されている地域もあるが，ほとんどが弁当持参である。幼児を取り巻く食環境を見ると，核家族化や共働き家庭の増加など社会の急激な変化に伴い，食生活も大きく変わってきた。幼児の嗜好にあわせた食材やメニューが優先されていることが給食や弁当を食べる幼児の様子からうかがえる。年々，保護者が作る弁当も，栄養バランスを考慮したものとインスタント食品を中心としたものや野菜抜きのもの等と二極化している。幼児の食生活の実態から，保護者との連携を図った幼稚園における食育実施が求められている。

地域の範囲(市区町村名)	人口	幼稚園		小学校		保育所	
		幼稚園数	幼児数	学校数	児童数	保育所数	幼児数
宜野座村	千人 92	園 (公) 3	人 82	校 (公) 3	人 394	園 (公) 1 (私) 2	人 60 135
浦添市	千人 106	園 (公) 11 (私) 3	人 1,127 401	校 (公) 11	人 8,541	園 (公) 5 (私) 16	人 490 1,410
南城市	千人 40	園 (公) 8	人 350	校 (公) 9	人 2,778	園 (公) 7 (私) 8	人 450 495
石垣市	千人 47	園 (公) 18 (私) 1	人 306 105	校 (公) 20 (私) 1	人 3,290 85	園 (公) 5 (私) 7	人 360 510
合　計	千人 285	園 (公) 40 (私) 4	人 1,865 506	校 (公) 43 (私) 1	人 15,003 85	園 (公) 18 (私) 33	人 1,360 2,550

(平成21年６月現在)

3　研究協力機関

・宜野座村立宜野座幼稚園，松田幼稚園，漢那幼稚園
・浦添市立浦添幼稚園
・南城市立玉城幼稚園，船越幼稚園，百名幼稚園，大里北幼稚園，大里南幼稚園，佐敷幼稚園　知念幼稚園，久高幼稚園
・石垣市立おおかわ幼稚園
・那覇地区幼稚園ＰＴＡ会　㈶沖縄県学校給食会

4　研究の内容及び方法

本研究は，幼稚園における食育を多面的に探るため，本県を４地区に分け，それぞれの地域の特色を生かし，４つの視点から研究を進めることにした。

⑴　研究の視点

食に関する今日的課題に取り組み，その成果を家庭，地域で共有することで，保護者や地域の食育にかかる教育力の向上を図るとともに，幼児の望ましい食習慣の定着と食育の向上に資することを目的とし「幼児の心の育ち」を基軸にした食育を実践研究する。

⑵　研究の内容

ア．野菜の苗植えを通しての地域とのかかわり

地域の人々とかかわりをもった栽培活動をとおして，給食に使われる食材に触れたり，野菜を育てたり，調理し仲間と共に楽しく会食したりして，幼児の食に対する興味・関心を高め，食べる喜びや楽し

さを味わい感謝して食する心をはぐくむための実践的研究を行った。

【実践を通して見えてきたこと】

○地域住民との野菜の苗植え

・地域住民との触れ合いの中で，地域の農作物について知ったことで，幼児がかかわった地域の畑だけではなく他の畑や店の野菜などにも興味・関心を持ち，野菜などを話題にする姿が多くなってきた。

・野菜の苗の植え方や水やりの仕方がわかり，自分たちでも進んで活動するようになった。

○給食の場面において

・いろいろな食材に出会い，野菜のことを知ったり実際に育てたりすることにより，その嬉しさからおいしく感じながら食べるようになってきている。食わず嫌いの幼児も野菜を食べるようになってきた。

○搾乳体験

・牛乳嫌いな幼児が牛乳を自分で搾ったことで，牛乳を飲んでみようと気持ちが動き，飲んだことがきっかけとなって牛乳嫌いを克服する端緒となった。

○クッキング

・クッキング体験を重ねることにより，皮むきや包丁の使い方が上達し主体的に活動を進められるようになってきた。幼稚園で経験したことを家庭でもやってみたいと思う子が多くなり，進んで手伝いをする子が増えてきた。

○弁当会の場面において

・ほとんどの子が弁当を完食し，弁当を楽しみにしている。完食後の弁当箱洗いを楽しみ，弁当を作ってくれた人の喜ぶ顔を想像しながらメッセージを伝えるなど，食べ物への感謝や作ってくれた人への感謝の心が芽生えつつある。

○講演会

・いろいろな食に関する情報を保護者と共有する事ができたとともに，幼稚園から幼児の育ち等を保護者に発信することで，保護者の意識が高まってきた。特に生活リズムの見直しの関心が高まった。

イ．親子の心をつなぐ食育（子育ち・親育ち）

幼稚園での弁当会は幼児にとって教師や友達と食べることを楽しむ絶好の場である。幼児が持参する弁当には，手作りから伝わる愛情，弁当に込められた思いが伝わってくる。手作りの弁当が子どもへの愛情表現の一つとなり，親と子の触れ合いやコミュニケーションを広げ，温かい気持ちが行き交い，親子の心のつながりをさらに深めてほしいと願っている。しかし近年，園児の弁当を見ていると，食材がレトルトや冷凍食品に偏っていたり，好きなものだけになっていたり，野菜が全く入っていなかったり，量が少なかったりと食そのものの課題が感じられることから，幼児だけではなく親の食に関する意識を高めていく必要性も見られる。そこで幼稚園において，恵まれた園庭を生かし季節の野菜の栽培や「親子弁当づくり」「親子弁当会」などを取り入れ，親子で取り組む食育活動を実施した。その成果として，親子にとって手作りの弁当の良さを再認識出来たこと等，「親育ち子育ち」の様子が下記のアンケート調査結果から伺える。

＜アンケート調査抜粋＞

問１　あなたは（記入者）幼稚園での弁当が親子の絆を深めると思いますか？

９月結果：はい	86%	いいえ	14%
２月結果：はい	100%	いいえ	0%

【「はい」と答えた人の理由として】

○弁当は母親の手作りであり，家庭の味でもある。「今日は全部食べたよ」「次は○○入れてね」など親子の会話も増えるので，そのことが絆を深めていく要素になっている。

○祖母の味が弁当を通して母親に受け継がれており，心のつながりを感じつつ作っている。このことがいつか子どもにも受け継がれていくと思う。

○子どもを思いつつメニューを考え，喜ぶ顔を想像する。子どもとの距離が近づく瞬間である。

○弁当のメニューを子どもと一緒に考えたり，買い物に行ったりする体験は自然に会話が増える機会となっている。

○母親が朝早く起きて作ってくれた弁当であることを知ることで，自分のための行為であることを感じ嬉しさや楽しみから愛情を感じていると思う。

○普段仕事が忙しく申し訳ない気持ちを，弁当に愛情いっぱい込めて作ることで思いが伝わっていると思う。

○自分だけの弁当箱，箸，ランチョンマットなど一つ一つがお気に入りで思い出とともに心に刻まれると思う。

【実践を通して見えてきたこと】

○親子で食育への様々な取り組みを通して，幼児

はもとより，保護者が幼稚園での食育活動について理解を示し，関心を高めることができた。

○登園渋りや弁当会を嫌がる等の課題を持った幼児の保護者が，食育講演会や親子弁当会などに参加したことをきっかけに食への関心が高まり，弁当づくりを工夫するようになった。その思いが幼児に伝わり，親子関係が安定してきたと思われ，いろいろな活動に意欲的にかかわり，食欲も旺盛になり，弁当を友達と楽しく食べるようになった。

○親子弁当づくりの活動は幼児にとって楽しい活動だったようだ。また，いつも保護者が作っている弁当づくりが実際やってみると，こんなに手間暇がかかるものだということを幼児が実感できた様子だった。

○保護者と子どもが一緒に弁当づくりをすることで会話が広がり，食への興味・関心や親子の触れ合いを楽しむことができた。

○食事をする前に，弁当を作ってくれる家の人に対して感謝の気持ちを言葉で表現し，家に帰ってから愛情を伝えるコミュニケーションのとり方を具体的に提示していきたい。

○保護者に対しては，弁当が愛情を伝えるコミュニケーションツールだということを感じてもらうために，講演会や園だよりなどを通して知らせていきたい。

ウ．伝統食文化をつなぐ食育

～地域・家庭・園をつなぐ食育～

幼児が地域の昔話や地域に伝わる伝統文化に接するとともに，地域や家族の一員として伝統文化にかかわり，伝統食に興味・関心を高め家族や地域の人々を大切に思う心を育てる研究を進めるために「バケツ稲作り」に取り組んだ。

【実践を通して見えてきたこと】

○食育の視点からバケツ稲を教材として取り入れた活動は，食育だけでなくすべて領域に総合的に広がり，幼児に新たな活動がうまれ，多くの刺激と育ちをもたらしたと思う。

○「伝統文化をつなぐ食育」の視点から見ると，保護者〔家庭〕，地域の人材を活用することで地域の伝統文化を若い保護者や子どもに伝えることができたとともに，楽しい親子の体験が食への関心の高まりのきっかけとなった。また，幼稚園が地域の行事，伝統文化の情報を発信することによって，家族で地域の行事に興味・関心が育っていることが感じ取れる。

エ．先人の知恵に学ぶ食育

～手作り体験で親子の絆を育む～

①地域の高齢者などと連携した親子手作り体験

・「一緒に食する楽しさ，作る楽しさ」を味わい，それをきっかけとして，園や家庭などで手作り体験の活用や高齢者との交流を積み重ね，園児の食への関心の高まりや心の育ち，保護者の望ましい食生活への関心の高まり等，かかわった人々，幼児の心の変容を探る。

②市小中学校「弁当の日」との連携

・保護者や地域と共に健康な心と体を育てる食習慣の形成を図っていく。

③市ヘルスメイト（食生活改善員）のメンバーと連携

④市立幼稚園（８園）を協力園とした市内連絡協議会の立ち上げ

⑤月々の誕生会は園の栽培物を使って親子料理作り

・誕生児の保護者や祖母等が園児達と一緒に園の栽培物を利用して料理を作り誕生児を祝う。

・例　６月：ピザトーストつくり　（ピーマン）
　　７月：ゼリーつくり（ピタンガ）
　　８月：ヒラヤーチー（ねぎ）
　　９月：冷やしそうめん（きゅううり）
　　10月：※パパイアシリシリー（パパイア）
　　※沖縄の家庭料理名

【事例１】＜園の栽培物を使って親子料理＞

＜園児の変容＞

○青パパイヤやピーマン，ネギ等が苦手で食べられなかったが，園で栽培し自分たちで料理をすることで食べるようになってきた。また「幼稚園で食べたパパイア炒めをつくって！」と母親にせがむようになってきた。

○「私の誕生会には，お母さんが来るよ！ 次は何つくるのかな？」月々の誕生会で保護者や祖母等と料理を作ることを楽しみにする姿が見られる。

○祖母等が園に来るのを楽しみにするようになった。

＜親の変容＞

○「『パパイヤシリシリー』はあく抜き等手間暇がかかることから家ではなかなか作らなかったが，子どもにせがまれ作るようになった」「手間暇かけることの大切さを子どもを通して実感した」「お弁当のおかずに入れるようにしている」「子どもの喜ぶ姿をみると作ってあげたくなった」など，保護者の声が多く聞かれるようになった。

○祖父母とのかかわりの中で，祖母等が料理作りは真心を込めることが大切だと伝えているため，若い母親が手作りの大切さを実感するようになった（※シリシリー：すりおろし切り）。

【事例２】＜地域の祖母等の知恵をかりての料理体験＞

園で栽培している野菜を利用し，また地域の特産物であるモズクを使っての親子おやつ手作り体験を地域の高齢者と連携し実施した。子どもの様子や料理のレシピを「食育だより」で配布し家庭でも活用できるようにした。その結果，おやつを親子で作る家庭での様子が報告されるようになってきた。

【実践を通して見えてきたこと】

＜幼児の変容＞

○４歳児は食わず嫌いの面が見られるので，園で四季折々の野菜を学級の目の前で栽培し，おやつづくりに取り入れることで喜んで食べるようになってきた。

○先生や友達，保護者や祖母等と一緒に作る楽しさを味わうことで食べ物に興味や関心が湧いてきた。「ゴーヤーって苦いけど，てんぷらにするとうまいよな」等。

○友達と一緒に食べることで嫌いな野菜が食べられるようになった。「幼稚園のゴーヤーとてもおいしいよ」「保育園の時はゴーヤーもピーマンも食べられなかったけど幼稚園生になって食べられるようになったよ！」などと自信につながっている。

○野菜をみつけ「幼稚園みたいに作って」と親にせがむようになっている。

＜親の変容＞（親の感想より）

○子どもが「幼稚園で食べたゴーヤーやピーマンがとってもおいしかったから作って」との声にびっくりした。嫌いだから作らなかったが，幼稚園で好き嫌いを克服していることにありがたく思った。

○子どもと一緒におやつを作ったり，料理をしたりと，保護者の意識に変化が表れてきた。

5　研究の成果及び今後の課題

⑴　研究の成果

①　幼児が自ら進んで食べようとする気持ちが育つには，食に関することに特化して考えるのではなく，幼稚園の生活全体で，「ひと・こと・もの」とのつながりを通して喜びや楽しさを味わい，食べ物への興味・関心を高める教師の援助のあり方と環境構成の工夫が大切であることがわかった。

②　喜んで食べる子を育てるには，栽培する野菜の種類や場所などの適切な環境構成を工夫し，子どもの気づきや気持ちに沿いながら，教師が共感したり，思いを受け止めたりしながら，子どもが喜んでかかわる体験が関係していることに気付いた。

③　保護者にとって，幼児が喜んで食べる姿を見たり，一緒に調理したりすること等，楽しさを共有する体験は，保護者の関心を高め，望ましい食習慣へと改善するきっかけになっていった。

④　幼児にとって食べ物を「おいしい」と感じることは食材そのものの味だけでなく，幼児の心をゆさぶる環境が大きくかかわっていることがわかった。

⑤　食育を通して地域の人や文化とつながることは，伝統食に親子で関心を持ち，地域の文化の良さに気付き伝えていこうとする気持ちを育てるとともに，食への関心を育てることにつながっていることがわかった。

⑵　今後の課題

①　朝食の欠食や偏食などの課題があることから，健康な心と体を育てる食への関心を高める取組をさらに工夫改善し，望ましい食生活にするために，家庭との連携を図りたい。

②　小学校との併設である立地を生かし，給食交流体験などを取り入れ，人と触れ合いながら食べる楽しさを味わわせ食への関心をさらに高めたい。

学校法人宮城学院　宮城学院女子大学

1　研究テーマ及び研究の観点

⑴　研究テーマ

探求的学びを実現する教育課程のデザイン

―「食」をコアとした協同的学びの実践の検証―

⑵　研究の観点

食育基本法が策定され，幼稚園教育要領に食育にかかる項目が加えられたことで，幼稚園現場においても，様々な食に関する実践がすすめられている。しかし，その実践が本当に幼児の発達の段階を踏まえた保育内容として適切なものとなっているか否かは，未だ十分な検証がなされてはいない。食の安全に対する関心が高まり，教育現場での食育が推進される今日，幼稚園での食に関する取り組みについて先駆的な実践と検証を進めることは，緊急課題と言ってもよいだろう。

そこで，本研究では，自然活動の一つとして「食」の活動と幼稚園と保育所で実施されている給食の実態に注目し，実践協力園３園を拠点に専門家（教育学，食教育）と実践者（幼稚園教諭，栄養士）が協同しながら「食」に関する新たな実践を構築し，環境の見直し，教育課程の再考，ネットワーク作り等の課題を検証する。

2　地域の概要

地域の範囲(市区町村名)	人口	幼稚園		小学校		保育所	
		幼稚園数	幼児数	学校数	児童数	保育所数	幼児数
仙台市	千人 1,035	園 (国)　1 (公)　3 (私)　109	人 132 149 15,824	校 (国)　1 (公)　126 (私)　3	人 854 55,138 753	園 (公)　49 (私)　66	人 4,885 5,882
合　計	1,035	113	16,105	130	56.745	115	10,767

(平成20年５月１日現在)

仙台市内の幼稚園は，113園中109園が私立幼稚園であり，市内の幼稚園教育の実践は，私立幼稚園がその主たる役割を担っている。市内の就学前の現状としては，保育所の入所希望者が年々増加するのに対し，幼稚園の入園児数が減少するという状況にある。平成22年１月1日現在，仙台市は，保育所の待機児童が1,724人おり，全国的にもその数が多く，仙台市は，「仙台市すこやか子育てプラン第３期行動計画」を策定し，待機児童ゼロをめざす整備計画等を発表している。

一方，私立幼稚園は，毎年園児不足により廃園を余儀なくされる幼稚園もあり，仙台市は，保育所待機児童の解消策の一つとして，幼稚園の空き教室を有効活用することも計画の一つとするなど，幼稚園と保育所のあり方の検討を進めている。

3　研究協力機関

学校法人　仙台みどり学園みどりの森幼稚園

（宮城県仙台市）

学校法人　聖ルカ学園 聖ルカ幼稚園（宮城県仙台市）

亘理町立亘理保育所（宮城県亘理郡亘理町）

4　研究の内容及び方法

本研究は，以下の２点を柱に進めた。

第１点は，「食」の体験が，自然体験や社会体験であると同時に，単に「食べること」を指導する教育内容にとどまらず，子どもの生活に位置づき，探求活動につながることで，さらに学びの実現をもたらす保育内容となることを明らかにした。栽培活動や，調理体験は，これまでも幼稚園の保育内容として，多くの園で実践されてきたが，それらは，子どもの興味と楽しい活動であることだけを実現した一過性の「体験」に終わりがちであった。作物を栽培して，収穫すること，それを調理して食べることは，分断された体験として，保育内容に位置づけられるよりも，継続した活動として子どもの生活そのものになっていくことで，意味が生まれる。また，種から植物が育ち，実を付けるまでのプロセスにも，調理して「食べ物」となるプロセスにも，たくさんの不思議と科学的な知が内包されている。また「食べる」という行為は，人の生活そのものであり，人類の知や工夫の蓄積が内在している。こうしたプロセスに幼児がかかわり，関心を深めることで，知りたい，やりたい体験に数多く出会う事ができるだろう。こうした体験から，子どもの知への欲求を刺激し，子ども自身が，それらの欲求を，遊びを通して表現し探求することができるような保育内容としていく教育課程を見直す必要がある。本研究は，これらの実践のプロセスを実践者と研究者が協同して，検証を進めたものである。

第２点は，保育の実践の場における給食の見直しである。幼稚園は，給食が義務付けられていないため，保育における給食のあり方に関する実践や研究は，十分に進められていない。それに対して，保育所は，給食が義務付けられており，栄養士も配置されていることから，先駆的な実践も見られる。その一方で，食の体験が単に「食べること」のみに終始し，保育内容としての十分な吟味がなされていないのも事実である。保育所の実践にかかわってきた栄養士，保育士とも交流しながら，保育における食のあり方を検討した。

実践協力園である３園は，それぞれにバイキング形式

の給食を実施している。みどりの森幼稚園は，自園で給食を実施しており，地域の食材を利用した郷土料理などを取り入れた給食を実施している。聖ルカ幼稚園は，自園での給食は出来ないまでも，地域の業者とネットワークを組みながら，園内の食環境を整え，園での給食を見直している。亘理保育所は，レストラン形式の給食の取り組みを始め，子ども自身が，食べる時間，食べる量，食べる仲間を自分で決定するという実践を試みている。

こうした取り組みを通して，保育における子どもの「食」の体験とは何なのかを，検証した。

本研究は，質的研究であるため，実践の一つ一つにあるエピソードを記録にとり，実践者と研究者が共にその意味について検証した。保育という臨床をどのように研究していくかという研究手法についても，さらに検証を進める必要がある。

また，研究の成果は，地域の教育実践の向上に寄与することを目指し，実践の様子を公開するとともに，公開シンポジウム等の場を設け，地域の実践者や研究者と共に検証する。また本研究の具体は，論文集にまとめ，地域の実践者や全国の研究者とともに，分析する。

5　研究の成果及び今後の課題

⑴　研究成果

本研究においては，研究協力園の３園において「食」の活動をコアとした実践を展開し，それぞれ研究テーマを設定して，実践の検証を進めた。

ア．探求的な学びを実現する「食」の活動

：みどりの森幼稚園（宮城県仙台市）

本園では，これまでも地域の農家と連携し，子どもたちが農家の田んぼや畑に行って，田植えや収穫の体験をし，その体験を契機に子どもたちが園での生活を作り上げていくことでプロジェクト型の保育を展開してきた。本年度は，「米」にかかわる体験をより身近なものにするために，園内に小さな田んぼを作り，そこで米作りを進めた。

園内にある「僕たちの田んぼ」は，単に米を育てることだけでなく，子どもたちにさまざまな課題を生み出した。ぼうふらがわいたり，すずめがやってきたり，収穫するための労作など，田んぼが身近にあることで生まれた課題に，子どもたちが向き合い，それらを解決し，乗り越えるために，探求し始めた。虫の名前を調べたり，すずめを退治する方法を考えたり，仲間と相談し，知を結集する姿は，「栽培活動・収穫体験」を超えた，学びの場を子どもたちに提供していった。

子どもたちは，苦労して育てた米を誰とどのように食べるかということを相談し，プロジェクトの終わりに「みんなのパーティー」を企画する。当日のプログラムの企画，調理，飾りつけなどの準備から実施までのプロセスをクラスの仲間とともに進め，パーティーをやり遂げる。

これら一連のプロジェクトは，「食」をコアとしてほぼ２年をかけて進められてきたものである。「食」の体験が単なる栽培，収穫，調理といった活動にとどまらず，子どもたちのさまざまな関心と探求を促したことがわかる。「食」の体験は，自然と対峙することを余儀なくし，自然の不確実性と科学的関心を刺激することから，保育内容にリアリティーを持ち込み，子どもの学びを実現する実践を生み出す可能性があるといえる。

イ．保育内容としての「給食」の再考

：聖ルカ幼稚園（宮城県仙台市）

幼稚園においては，給食の提供が義務付けられていないため，調理環境や専門職員（調理師，栄養士）などの配置が十分に整えられていないのが現状である。しかしながら，昨今では，給食の有無が園児募集にかかわってくるため，何らかの形で給食を提供している幼稚園が増加している。

本園においては，地域の幼稚園の多くが採用している外注の弁当を「給食」に採用していた。しかし，３歳から５歳までが，同じ分量の弁当を提供され，子どもが好むと思われている食材中心の弁当に疑問を感じ，給食の見直しを始める。

十分な調理空間のない幼稚園ではあるが，米飯をたく程度のことは，可能であると考え，まずは園内で米飯をたき，それを子ども自身が好きな量をよそえるように，茶碗とおひつを用意した。園内にご飯が炊けるにおいがし，子ども自身が給食にかかわるようになることで，「給食」を教師が用意し，ルールを守って，残さず食べる時間から，子ども自身が自らかかわる生活時間となった。

保育者自身も，給食を「保育内容」として見直すことで，給食の環境，内容，かかわり方を再考するようになった。同時に，畑の生かし方，調理や季節の食べ物への関心など，食事をとることが目的化された「給食」から「食」をコアとした保育内容として，実践が展開した。

保育内容として給食を再考することで，子どもの主体的な生活に根づいた保育実践が可能となり，保育者自身の保育観の再考の機会ともなった。

ウ．子どもの自己決定を支える給食の取り組み

：亘理町立亘理保育所（宮城県亘理町）

本所では，子どもの朝食時間，登所時間に差があるにもかかわらず，一斉に午前中の遊びを中断し，昼食時間としたり，みながほぼ同じ分量に配膳された給食をとることによって生じている子どもの諸課題を見直すために，「レストラン型」の給食の実践に取り組んだ。レストラン型の給食では，子どもたちは好きな時間にランチルームに集まり，好きな仲間と好きな分量の食事をとることができるようにした。つまり，いつ（時），誰と（人），どのように（食事内容，量）食事するのかを自己選択して，給食の時間を自分でデザインするのである。

提案当初は，保育者自身も不安を抱きつつ実践するが，子どもが自分の食事を自己決定できるようにしたことで，子ども自身が午前中の生活（遊び）にも主体的にかかわり，満足のいく生活を自身で作り出していくようになった。また給食そのものに対しても意欲的な姿がみられ，子どもの負担とならない楽しい食事が実現するようになった。

実践を進めるにあたって，週に一度は保育所の職員全員（調理師，栄養士，保育士）によるカンファレンスを行った。それぞれの専門的な視点からの提案及び専門を超えた議論を通して，子どもにとって，よりよい給食の実践とは何かを検討した。その結果，子ども自身が，ヒト，モノ，コトに対して，主体的なかかわりをもつことを重視する保育という営為において，給食という実践もまた子どもが主体的にかかわる場面や環境を用意していくことが重要であることが明らかとなった。

上記のように，３つの実践は，それぞれ「食」をテーマに，異なるアプローチから幼児教育における「食」の活動を検証している。「食」の活動が，狭義の「食育」実践にとどまることなく，「食」をコアとした保育内容と捉え直すことで，子どもの関心のひろがり，幼稚園の生活の充実，そして自然に対峙することで出会う様々な探求の場を提供することができることが明らかとなった。

また，それぞれの実践が単に，一過性の体験にとどまることなく，継続的な活動のなかで，学びが実現するような状況を作りだすことで，子ども同士が協同し探求する姿を見ることができた。こうした状況の中に，子どもの協同の学びが生まれるのではないだろうか。

⑵　今後の課題

本研究は，日々の実践事例を記録に取り，それぞれの事例の検証をするという「質的研究」によるものである。事例の検証には，研究者（幼児教育学・食教育）が立会い，実践者と共にカンファレンスを行い，実践をリフレクションし，検討した。

これらの研究においては，まず質的研究の研究法について，実践者と研究者が十分な理解をしておくことが重要となる。実践の記録のとり方，分析の視点など，科学的な研究を進める上での基礎的な力量を実践者が身に付けていくことが求められると同時に，研究者は，幼児教育という実践（臨床）をどのように検証していくことが有効な研究方法となりうるのかという研究方法の検証も進める必要がある。

この点については，本研究においては，十分な検証段階に至っていないといわざるを得ない。「質的研究」のアプローチの可能性については，実践者の疑問に向き合いながら，継続的に検証していく必要があるだろう。

また，本研究は，地域の幼稚園，保育所を研究拠点園（モデル園）として選択し，一年にわたって実践研究を進めたものである。それぞれの実践は，十分に他園の参考となりうる取り組みであるが，こうした実践を地域の一つひとつの園の事情のなかで，取り組んでいくには，様々な課題があることが予想される。今後は，地域のそれぞれの幼稚園が抱える事情や特徴に応じた実践のあり方を検討する上で，必要な課題を整理，共有し，地域の幼稚園の質的レベルの向上を実現するための取り組みを進めていく必要がある。

次年度は，今年度の研究成果をもとに，教育委員会や地域の幼稚園連合と連携しながらより多くの実践者と研究者がかかわって検証を進める予定である。

また，本研究では，十分に進めることの出来なかった小学校との連携をも視野にいれていく必要があると考えている。